

## 『ミカドの外交儀礼——明治天皇の時代』

中山和芳著

朝日新聞社 二〇〇七年一月

眉を剃られ、顔を長く見せるために額の真中に墨で眉を書かれ、お歯黒をし、白粉を塗りたくった顔に雄鶏のとさかをおおせるかぶりものを載せ、一言も発することのない十四、十五歳の背の高い少年——これがはじめての外国人使節であるフランス人公使ロッシュの目に映った明治天皇睦仁の姿であった。時に一八六八年（慶応四年）三月二三日、場所は京都御所紫宸殿。後に御真影となり全国に出回った大元帥服に身を包み、濃い黒い髭をたくわえ、左手に剣をつかみ右前方を鋭い目でみつめる精悍な明治天皇の写真（実はこれはお雇い外国人キョッソーネの画を撮影したもので、明治二年の作）に見慣れているわれわれには、とても同一人物とは思えない。

本書はこのお稚児さんを思わせる女性的少年天皇が、大日本帝国の統帥者としての男性的天皇へと変貌していく姿を、諸外国の外交使節の謁見の記述をとおして紹介することを主眼としている。政権がそれまでの大君（タイクーン）から天皇（エンペラー）に代わった時期から、明治憲法発布までの時代を扱っている。尊王攘夷から開国へと急旋回し、その後新政府のもと

で脱亜入欧の名の下に西欧化という近代化の道をひた走った明治日本の変貌ぶりを、天皇、皇后を初めとする皇族やそれを取り巻く閣僚たちの文字通り立ち居振る舞いを通して描き出すという視点は、これまでに類書もなく、ユニークなものである。

徳川時代の天皇は京都の御所を出ることはほとんどなく、いわば幽閉されていたも同然であった。かつて同志社大学の私の研究室からは御所が眼下に見下ろせたから、その大きさは肌で実感できる。石塀に囲まれた御所内宮の面積は意外に小さい。幕末の一八六三年に孝明天皇が攘夷祈願のため加茂社と石清水八幡宮へ行幸したのがなんと二三十年ぶりの外出だというから驚く。それほど天皇とは民衆からほど遠く、民衆は天皇の存在すらほとんど知らなかったという。したがって明治新政府の最初の仕事は「見えない天皇」から「見える天皇」へ、つまり天皇の「視覚化」ということだった。

「本書は……天皇が外国人、ひいては諸外国に対して、どのように視覚化されたのかを検討することを意図している。具体的には、天皇（ならびに皇后）が外国公使や来日した賓客に対して、どのように応接したかを詳しく述べようと思う。それによつて明治天皇の行った外交儀礼が明らかになるはずである。……けれども、外交儀礼を正面に据えて、その変遷を論じたものは、管見の限りでは存在しない」と著者は言う。この言葉のとおり、著者はいささか禁欲的にすぎると思われるほど、価値判断をまじえることなく、ひたすら外交儀礼の変化に目を凝らしていく。しかも外国使節団の記録と、日本側の「明治天皇紀」などの記述を比較することで、同じ出会いが全く違った光を浴

びて、立ち現れる。

一八六八年と言えば鳥羽伏見の戦いに始まる戊辰戦争の真つ只中である。そんな中で新政府は国の元首である天皇に外交使節を会わせることで、自らの承認を求めることに躍起となっていた。しかしそれが実現するまでには大変な道のりがあった。しかもこの時期には堺事件、神戸事件といった外国人襲撃事件が多発していたのだからなおさらである。東久世の回顧録によると、半ば禽獣の如く考えていた「異人」が天皇と握手するということをめぐつて大激論になったという。なにしろ自国の「臣民」の手さえ握ったことがなかった天皇が汚れた異人の手を握ることになっては天照皇大神宮に申し分けないと言うのだ。最も騒いだのは宮中の女官たちだったというからその頃の天皇の位置が推し量られる。これに対し公使は「外国の天子の名代」だからこれを断れば外国軍が攻めてきて、京都は焼き払われるかも知れぬといつて東久世は恫喝まがいの説得をしたという。こうして諸外国の公使たちとの謁見が始まるが、当初は試行錯誤の連続であつたらしい。しかし外国側もこの万世一系の天皇に対しては敬意を払い慎重な態度を示したようだ。たとえば英国公使パークスの拝謁の時には、宮廷に伺候したことの無いアーネスト・サトウには陪席が許されなかつたと言う。しかし日本側の通訳は伊藤俊介（博文）だったと言うから、この点では日本のほうが身分制度の壁は崩れていたと言えそうだ。

それでも最初の頃は、欧米人には理解不能な宗教的儀式がとりおこなわれていたらしい。その代表格が、「エジンバラ公の清め」と言われる事例である。明治二年、場所は江戸城に移つ

ている。ヴィクトリア女王の次男を迎えるために、御幣によつて汚れを祓つたのである。この話を聞いた福沢諭吉は「実に苦々しいことで、私はこれを聞いて、笑いどころではない、泣きたく思いました」と『福翁自伝』で慨嘆しているが、エジンバラ公本人から離れたところで、神官が御幣によつて悪霊を払つたことに日本側の妥協を見る南校お雇い外国人グリフィスのほうが冷静に事態を観察していると私には思える。

しかしひとたび禁を破つてしまうと、歯止めが利かなくなる性向が日本人にはあるが、その後天皇の接見は頻繁になり、ますます天皇の「視覚化」は進み、それと同時にそれまでほとんど無言で動きがなかった天皇の肉声が聞こえ出し、御簾の奥からその姿を見せるようになっていく。こうした動きに警鐘を鳴らしたのは英国代理公使アダムスだった。米国が天皇の大統領領化を画策しているとして変革の急速さに危惧をおぼえ、岩倉具視に苦言を呈したという。一八七一年のことだ。一八七四年に来日し、東京外国語学校魯語科のお雇い教授となったメーチニコフは、ジュネーヴですでに岩倉使節団と出会つており、そのときの印象から岩倉が明治政府の守旧派であり、ロシアのピョートル大帝の大的信奉者だったと証言しているが、外遊直前の岩倉がアダムスの苦言に膝を打つていたことは注目している。岩倉は欧米列強ではなく、ロシアを近代化のモデルと考えていたようである。二人目の国賓として来日したロシアのアレクセイ公（アレクサンドル二世の第三皇子）の歓迎はそれまでと違っていた。天皇は自ら乾杯の音頭を取り、肖像写真を公に贈っているのである。さらに天皇はロシア軍艦を訪問さえしている。このことは一大事件として各国のマスコミが取り上げた

らしい。著者は触れていないが、この天皇のロシアに対する好誼の影に岩倉の姿が見え隠れする。

実はちょうどこの頃、日本の外交態度を占うような国際事件が起きていたのであった。世にいう「マリア・ルース号事件」である。中国人労働者を満載したペルー船籍の帆船から一人の労働者が脱出、日本側に助けを求めたのだった。時の外務大臣副島種臣はこれを奴隷船と断定し、出航を停止し、労働者全員を中国に帰還させたのである。ペルー政府はこれに強く抗議し、国際問題になるが、日本側の要望でロシア皇帝アレクサンドル二世を裁判長に仲裁裁判が開かれた結果、七五年に判決が下り、日本が勝訴したのである。ロシア皇帝が裁判長とは奇異の感を持つかもしれないが、六一年の農奴解放によつて、解放皇帝の名は世界にとどろいていたのである。おそらくこの件でも、米欧回覧から帰国した岩倉の建言があつたものと私は推察する。

この時期、天皇はお雇い外国人を招待し、断髪し服装も洋服に改め、自ら西洋化を進めていく。例えばジャーナリストのブラックはそれまで「つま先で歩いてきた」天皇が「頭髪と服はヨーロッパ風、歩き方は自然で、活発であり、何もかも前よりよくなった」と評している。しかしさすがフランスの法律家ブスケはこうした西洋振りに不快感を隠せない。「気取つた物腰で身をとりにつくりうが、その物腰は彼らのものでも我々のものでもなく、まさに何人のもでもないが故に万人を驚かす」と。しかしこうした天皇の西洋化に象徴されるように、日本の支配階級の西洋化には益々拍車がかかつていき、鹿鳴館外交へと突き進んでいくことはよく知られている。しかし天皇自身は舞踏

会は嫌いだったようだ。自由民権運動の激化事件が吹き荒れる中、夜な夜な開かれる夜会に集う日本人高官たちの燕尾服姿を、ピエール・ロチは、「いつも、なんだか猿によく似ている」と評したものだった。

ロシアを専門とする私にとって、「長崎弁を話すロシア大公」のくだけは面白かった。得意になつて長崎弁を話すアレクサンドル大公の言葉に皇后が涙を流して笑つたと言うのだ。おそらく東洋艦隊の将校だった大公は長崎の稲佐村の日本人妻から教わつた日本語を披露したのでらう。しかもその道の達人、首相の伊藤博文が大いに興味を示し、「稲佐の方言をととも上手に教えたことに対し、政府の名において、その方に感謝したいと思います。その方からどのくらい日本語を習われましたか」と別れ際に伊藤が尋ねたと大公自身書き残しているのだ。

わが国の文明開化に果たした天皇の役割を、膨大な文献を駆使して跡付けた本書は、われわれが観念の中で単純化して整理してしまふ歴史プロセスを、時に重箱の隅をほじくるかに見えるほどのきめ細かさで具体的に再現しており、近代化というものを考え直す上で貴重な素材を提供してくれている。近年天皇制をめぐる議論は喧しいが、こうしたイデオロギーにとらわれない沈着冷静な記述に徹底した著者の見識は高く評価されていいだろう。

(渡辺雅司)